

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	中西 智子
論文題目	『源氏物語』引用表現論——和歌および歌語表現を中心に——
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、『源氏物語』に関わる和歌ならびに歌語などの引用について論じている。その目的は、冒頭の序章において説かれているように、現実世界の出来事と虚構世界との重なりあう地点におかれた〈ことば〉のになう重層的な意味内容とその機能の探究ということにある。その探究は、おもに二つの視点から考察される。すなわち、一つめは物語の内部（虚構の世界）において先行する和歌などがいかに引用されているかという視点、二つめは物語の外部（現実の世界）と『源氏物語』とがいかに関わり、また『源氏物語』がいかに引用されているかという視点である。そうした二つの視点に対応して、全体は二部構成となっている。なお、全体の分量は四百字詰原稿用紙換算で八〇〇枚以上に及ぶ。</p> <p>「第一部 『源氏物語』に見える引用の諸相——人物造型にかかわる手法の多様性——」では、『源氏物語』における和歌、歌語、さらに催馬楽・風俗歌など歌謡の引用によって重層的な意味が生成されていることを丁寧論じつつ、従来の注釈、論考では看過されてきた人物造型に関わる多様な手法を明らかにしている。</p> <p>四つの節からなる「第一章 女君の官能性の形象——古歌・歌語・歌謡の引用表現から——」では、紫の君（少女時代の紫の上）、女三の宮、朧月夜、玉鬘などの女君たちに関する叙述において、古歌、『万葉集』に由来する歌語、催馬楽・風俗歌などの引用をちりばめることによって官能的な意味合い、艶めいた雰囲気などがあらわされていることを論じている。そこで何が引用されているかという点については、古注釈以来、現代にいたるまでの諸注釈などにおいてほとんど指摘済みといえるが、これらの官能性の形象についての指摘は、従来の諸注釈の把握、および諸論考の説を大きく更新するものといえる。</p> <p>また、「第二章 女君の〈老い〉の形象——浮舟・朝顔齋院をめぐる引用表現から——」においては、三つの節にわたり、浮舟および朝顔齋院の〈老い〉の形象方法が論じられている。ここでも『万葉集』などの古歌との関わり、また白詩「陵園妾」などの引用を手がかりとして、たとえば〈老い〉にまつわる悲壮感に諧謔性を帯びさせるような重層性をとらえている。また、『紫式部集』収載歌と浮舟の詠歌との共通性に注目しつつ、〈老い〉を経由した華やぎ、軽み、さらには〈生〉へと向かう本能的な力なども解析されている。</p> <p>一方、「第二部 紫式部周辺の和歌と『源氏物語』——「作り手」圏内の記憶と連帯——」では、紫式部周辺における和歌が検討の対象とされる。すなわち、紫式部という物語作者と何らかのつながりを有する人物の詠歌が、クローズアップされることとなる。</p> <p>「第一章 『為信集』と『源氏物語』との関わり——紫式部の母方の祖父「為信」の名を冠した家集——」は、副題が示すとおり、紫式部の外祖父の名を冠した『為信集』と『源氏物語』との関係を四節にわたってきわめて詳細に論じたものである。この『為信集』と『源氏物語』との間に見いだされる複数の類似、照応箇所についてはもちろんこれまでも論じられてきたのだが、問題は『為信集』の「為信」が紫式部の外祖父といえるのか、そもそも『為信集』は『源氏物語』よりも先に成立したといえるのか、といった疑問がいまだに解決していない点である。本章では、これまでの対立する諸説を整理した上で、書名、詞書、編纂のあり方、収載歌の特徴等々、さまざまな角度からこの難解な歌集について検討し、『源氏物語』に先行する歌集であると結論づける。さらにこの「為信」を紫式部の外祖父と仮定した場合にみえてくる特質、すなわち自身の一族を戯画的にほめかしつつ自己を表出するという、紫式部の志向性をとらえている。</p> <p>つづく「第二章 紫式部周辺における『源氏物語』摂取」では、紫式部周辺の人々が詠んだ和歌における</p>	

『源氏物語』引用をふまえ、作者の交友圏（もしくは交遊圏）の実相をとらえている。『源氏物語』をふまえた和歌を詠んでいる人物としては、中宮彰子、一条天皇、彰子付女房たち、さらには紫式部の次世代の人々（たとえば紫式部の娘、大弐三位と男性官人）などがとりあげられる。特に本章で強調されるのは、これらの人々の間で『源氏物語』が果たしている、紐帶的な機能である。

以上、本論文の内容と特質についておおよそ整理してみたが、『源氏物語』の引用を論じた多数の先行研究に比しても、本論文は次の三点において特にプライオリティを有しているものと判断される。

- ・『源氏物語』注釈の歴史は八百年以上にわたる。現存最古の注釈『源氏釈(伊行釈)』以来、さまざまな和歌引用、歌謡引用などについてはほとんどが指摘済みであり、さらに近年は『源氏物語』の和歌と和歌的表現に関する研究がかなり盛んになっている。そうした中で、本論文の第一部では、特に女君の造型に関わる和歌、歌謡などの引用において、従来解析されることのなかった官能性、あるいは〈古い〉にまといつくような諧謔性を読みとることで、『源氏物語』の重層的な表現が明らかにされている。
- ・第二部－第一章で扱われた『為信集』については、近時のまとまった成果として笹川博司『為信集と源氏物語』（風間書房、2010年）などがあるものの、本論文は同書を超えたレベルで多角的に『為信集』なる歌集がどういうものかということを慎重に吟味し、さらにそこから『源氏物語』との関わりについても詳しく考察している。ここまで踏み込んだ考察は初めてのことといえよう。
- ・第二部－第二章でとりあげられた『源氏物語』を引用する和歌についても、先行研究で検討されてきたものの、物語文学をテキストとして読むという研究方法が隆盛した1970年代後半以降は研究の進展があまりみられなかった。本論文は、単なる引用の指摘にとどまらず、物語作者紫式部の交友圏（もしくは交遊圏）についての研究として新しさを有している。特に、第二章－第二節の礎稿となった学会誌掲載論文は、昨年、複数の学界時評において高く評価されていることから、この点は確実であろう。

公開審査会においては、審査委員より、特に書き下ろしの部分が大半を占める第二部に対する質問と意見が相次いだ。新しい成果として価値を有するものの、たとえば、特に十世紀後半から『源氏物語』が成立する十一世紀初頭において和歌あるいは歌語が具体的にどのように流通していたのか、流通している場合はどのような書物などに依拠していたのか、またそうした流通の成り立つコミュニティはどのようなものか、といった点について、今後のさらなる検討が望まれるという意見が出された。また、『為信集』については、享受・流通の実態を明かにすることはきわめて困難ではあるが、少なくとも流通した可能性を考えながら議論を深められるのではないかという指摘もあった。

以上のように、これから考察を深めてゆくべき点はいくつかのこされているものの、既に学界において高く評価されている学会誌掲載論文などをベースにしなが、総じて丁寧かつ緻密な考証に基づき、これまでの注釈および論考がとらえきれていなかった諸問題を明らかにしているため、本論文が課程による博士學位論文として十分にふさわしいものと判断した。

公開審査会開催日	2014年 1月 17日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学 文学学術院・教授	博士(文学) 早稲田大学	陣野 英則
審査委員	早稲田大学 文学学術院・教授		兼築 信行
審査委員	早稲田大学 教育・総合科学学術院・教授	博士(文学) 早稲田大学	福家 俊幸
審査委員			
審査委員			